

沈陽・民主新聞社。

(24) 当時の彼らの活動については拙論「ハルビンの抗日文芸運動緒論—金劍嘯の活動を中心に—」(人間文化研究年報)九、八五・四。お茶の水女子大学人間文化研究科)を参照されたい。

(25) 三五 在上海。『東北作家近作集』(三六・九 上海生活書店。〈光明〉一—七付録)・『月夜到黎明』・『中国新文学大系統編』所収。

(26) 「ハルビンの抗日文芸運動緒論」参照。

(27) 三・一〇。〈解放日報〉(四二・五・二〇)原載、〈文芸報〉二(五八・一・二六)・『再批判』(五八・六 作家出版社)所収。

(28) 八〇・二・二七 於北京友誼医院(作者白朗口述、女兒白瑩筆録)。人民文学出版社版(八一)所収。

(29) 舒群は、九・一八後抗日義勇軍に参加した後、一九三二年三月、第三インターナショナルの情報員となり、九月、入党している。

(30) 一九四二年香港で客死。

(31) 一九八五年来日の折、都立大学での座談会の席等で、なぜ覚員にならなかったのかという質問に対し、入党しなくても党に対する忠誠心は変わらないと発言している。

「作家蕭軍に聞く」(季刊〈鄒其山〉一〇 八五・冬)参照。

芭蕉における杜甫

伊古田 陽子

一 はじめに

芭蕉が生前、杜甫の詩を愛好していたことは、種々の著作の中から窺える。例えば、「李杜が心酒を嘗て」(天和元年、一六八一、五月、『虚栗』抜)、「唯李・杜・定家・西行等の御作等、御手本と御意得可被成候。」(貞享二年、一六八五、正月廿八日附の半残宛書簡)、「はるかに宅家の骨をさぐり、西行の筋をたどり、樂天が腸をあらひ、杜子が方寸に入(る)やから、わづかに都鄙かぞへて十ヲの指ふさず。」(元禄五年、一六九二、二月十八日附の曲水宛書簡)などである。

芭蕉にとって杜甫の詩がいかなる意味を持ったのか、また杜甫の詩をどのように享受していったのかについて、本稿ではいくつかの作品を比較しつつ、その影響関係を考察することで明らかにしていきたい。それによって芭蕉における杜甫の存在が浮き彫りにされると思うのである。

二 芭蕉の見た杜甫のテキスト

芭蕉は、どのテキストによって杜甫の詩を知り得たのか。黒川洋一氏は、

芭蕉の句集、文集に見える杜甫の詩に典拠を持つものが、若干の『古文真宝』に見える古体にもとづくものと、『杜詩絶句』に見える近体にもとづくものを除いて、『杜律集解』に採られる詩に限定されている(『杜甫の研究』創文社東洋学叢書 三五九ページ)。

と書かれているが、果してそれだけであろうか。芭蕉生前中に刊行された杜詩に関するテキストで、芭蕉が見ることが可能であったものをあげると次の通りである。

寛永九年(一六三二)に、『精選唐宋千家聯珠詩格』二十卷(宋于濟・蔡正孫編)が、京、村上平楽寺より刊行されている。その巻一に、次章で述べる芭蕉の「乞食の翁」や「寒夜の辞」に影響を与えた「絶句四首」其三が見られるところから、このテキストを見た可能性があると考えられる。現に、芭蕉の「秋とせ却て江戸を指古郷」(延宝六年 一六七八 『甲子吟行』)の発句が、『聯珠詩格』巻二にある賈島の「渡桑乾」の詩、「客舍并州已十霜 歸心日夜憶咸陽 如今又渡桑乾水 欲指并州是故郷(并州に客舎して已に十霜 歸心日夜咸陽を憶ふ 如今又渡る桑乾の水 却って并州を指す是れ故郷と)」に拠るとも言えるからである。

また、明暦二年(一六五六)芭蕉十三歳の時に、『刻杜少陵先生詩分類集註』二十三巻首一卷(明邵宝注 過棟箋 鶴飼信之等点)が刊行されている。これは、杜詩のすべてを収めている点で、芭蕉が詩体の別なく見た可能性が強い。この絶句のみを取り出して、後の寛文二年(一六六二)芭蕉十九歳の時に、

芭蕉における杜甫

『刻杜少陵先生詩集註絶句』二巻(杜詩絶句)(明邵宝注 過棟箋)が吉田太郎兵衛によって刊行されている。黒川氏は、この『杜詩絶句』を芭蕉の見た絶句のテキストとされるが、あなたがそれのみとは言えないように思われる。

古詩に関するものも、黒川氏は、

『杜律集解』以外のものとしては、当時俗間に普及していた『古文真宝』がある。それには「遊龍門奉先寺」「茅屋為秋風所破歌」「飲中八仙歌」などの三十三首の古体の詩を収める。芭蕉の杜詩を踏まえるもので、古体に関するものは、この『古文真宝』に見えるものばかりであるといつてよい。(前掲書 二七五ページ)

と、『古文真宝』のみとされるが、後の第四章——『奥の細道』と「同谷紀行」の旅——で述べる四つの紀行詩は、いずれも『古文真宝』にはない。また、

「遊龍門奉先寺」は五言古詩ゆえ、『杜律集解』には見えぬが、芭蕉はこれを当時世に流布していた『古文真宝』より知ったものと思われる。(前掲書 三五六ページ)

と述べておられるが、「遊龍門奉先寺」の詩は五言古詩でありながら、『杜律集解』巻一に見えるのである。よって、芭蕉の見た古詩は『古文真宝』に見えるものばかりではないことになる。

律詩は、寛永二十年(一六四三)芭蕉生誕一年前に初めて翻刻された『杜律集解』(明邵傳撰 陳学楽校)を見た可能性が強い。それは、芭蕉の「曲水宛書簡」(前掲)にある「杜子が方寸

に入(る)」という表現が、『杜律集解』陳学楽の序にある「入杜子門墻」という表現を踏まえていると考えられるからである。しかし、第五章で述べる「白小」の詩は五言律詩でありながら『杜律集解』にないため、あながちこれのみを芭蕉の見た律詩のテキストとは論断しにくいのではないかと思われる。以上の点から、芭蕉は絶句、律詩、古詩を通してすべてを収める『刻杜少陵先生詩分類集註』に目を通していた可能性が極めて強いと思われるのである。

三 芭蕉庵と成都浣花溪の草堂

芭蕉は自らの芭蕉庵を杜甫の浣花溪の草堂に模していた。

例えば、天和元年(一六八一)末の作とされる「乞食の翁」の文章には、

泊船堂主 桃青

窓含西嶺千秋雪 門泊東海萬里舟 我其句を職て其心を見ず。その侘をはかりて其樂をしらず。唯老杜にまされる物は、獨多病のみ。閑素茅舎の芭蕉にかくれて、自乞食の翁と呼ぶ。(岩波書店『芭蕉句集』発句篇補注)

とあり、杜甫の「絶句四首」其三(『杜詩詳註』卷十三。以下『詳註』とのみ記す)の後半二句を引用し、かつ堂号泊船を、その詩句よりとっていることがわかる。この泊船堂とは、深川の芭蕉庵のことである。当時深川からは富士がよく見え、隈田川には各地からの船が寄り集まっていたことは、次の「寒夜の辞」と題する文章(天和元年冬の作)によって明らかである。

深川三またの邊りに艸庵を侘て、遠くは土峰の雪をのぞみ、ちかくは萬里の船をうかぶ。(岩波書店『芭蕉文集』) 即ち、芭蕉は杜甫の詩に拠って芭蕉庵の近遠景を描こうとしたのである。ちなみに、杜甫の「絶句四首」其三は次の通りである。

兩箇黃鸝鳴翠柳 兩箇の黃鸝翠柳に鳴き

一行白鷺上青天 一行の白鷺青天に上る

總含西嶺千秋雪 窓には含む西嶺千秋の雪

門泊東吳萬里船 門には泊す東吳萬里の船

この詩は『詳註』卷十三に見え、仇兆鰲は「此れ朱本に依れば前詩と連篇す、旧永泰元年と在る者は非なり。是の年四月、嚴武方に卒す、公行きて蜀を出づ」と言っている。永泰元年(七六五)四月に嚴武の死により、蜀を去ったことから、前詩「絶句六首」と同様、「此れ当に是れ広徳二年草堂に復歸せし時の作なるべし」ということになる。時、広徳二年(七六四)の夏、成都浣花溪の草堂において、「溪前の諸景を咏ず」である。

ここで注目したいのは、芭蕉が泊船堂こと芭蕉庵を、杜甫の浣花溪の草堂に模しているという事実である。更に内容の面から考察していくと、季節に違いこそあれ、実によく杜甫の詩を味わっていることがわかる。例えば「公常に東吳に下るの志有り(邵宝の注)、安んぞ流に順て長く往て以て夙心を遂るを得んや(過棟の箋)」、「刻杜少陵先生詩分類集註」卷十五、七言絶雜賦類。以下『分類集註』とのみ記す)の部分を読むと、杜甫が

成都に在っていかに東呉の地に下ることを望んでいたか、また、それが年来の志でありながら絶望に終ってしまうであろう寂しさが窺える。芭蕉はこの部分を恐らく読んでいたろう。だからこそ杜甫の句そのままに「東呉」と記さず、敢えて「東海」と記したのだと思う。皮相的な理解では思いもつかないことと言えよう。東海に下るといふ年来の志を持っていた芭蕉行（別は、現に、貞享元年（一六八四）東海地方へ下る『野ざらし紀名』甲子吟行）の旅に出たのである。また、「乞食の翁」の文中にある「我其句を職て其心を見ず。その侘をはかりて其樂をしらず。」の部分は、杜甫の「東呉に下るの志」や「夙心」の何たるかを完全には理解し得ないところから言われた謙辭と受け取れるのである。

このように、芭蕉は芭蕉庵で成都浣花溪の草堂での杜甫の姿を思い浮かべていた。このことは天和元年（一六八二）秋の作、老杜茅舎破風の歌あり、坡翁ふたゝび此句を侘て屋漏の句作る。其世の雨をばせを葉にきゝて、獨寐の艸の戸

芭蕉野分して盥に雨をきく夜哉 禹柳伊勢紀行

（岩波書店『芭蕉句集』）

の詞書と句が、杜甫の「茅屋為秋風所破歌」(『詳註』卷十。『古文真宝』前集卷八歌類)に拠ることからも言える。右の詞書の「艸の戸」は、もちろん芭蕉庵である。また、杜甫の「茅屋歌」は、『詳註』卷十に引用された清初の朱鶴齡の注に拠れば、「上元二年成都の詩の内に編入す」とあり、七六一年、成都浣

芭蕉における杜甫

花溪の草堂での作ということになる。ちなみに、影響を受けているのは次の部分である。

八月秋高風怒號 八月秋高くして風怒号す

卷我屋上三重茅 我が屋上三重の茅を巻く

……………

牀頭屋漏無乾處 牀頭屋漏れて乾ける処無し

雨脚如麻未斷絕 雨脚麻の如く未だ断絶せず

詞書にある「此句」とは、「牀頭屋漏無乾處」を指す。また、蘇東坡の「屋漏の句」とは、「連雨漲江二首」其一の「牀牀避漏幽人屋(牀牀漏を避く幽人の屋)」を指す。芭蕉は、野分の風があたってはためく芭蕉の葉音に、浣花溪の草堂での杜甫や、惠州での東坡の雨中の感慨をしのびつつ、独り芭蕉庵の盥に落ちる雨の音を聞いているのである。何とも侘しい限りだが、杜甫の「茅屋歌」全体が持つ天下の寒士への救済の思いなど、いわば社会的、現実的視点が全く切り捨てられていることにも注目したい。「芭蕉野分して」の句文とほぼ同期に作られた「乞食の翁」(前掲)の文中に、「我其句を職て其心を見ず。その侘をはかりて其樂をしらず。」と言うように、芭蕉は「茅屋歌」から「侘」のみ取り出し、「其心」——社会性——を敢えて見なかつたということだろう。

更に、元禄五年(一六九三)新築された芭蕉庵に移り住んだ芭蕉は、その間の事情を「芭蕉を移す詞」(元禄五年八月)と題する文章に書き記している。

今年五月の半、花たちばなのにはひも、さすがに遠からざ

れば、人々の契りも昔にかはらず。猶此あたり得立さらで、舊き庵もやゝちかふ三間の茅屋つきくしう、杉の柱いと清げに削なし、竹の技折戸安らかに、葭垣厚くしわたして、南にむかひ池にのぞみて水樓となす。地は富士に對して、柴門景を追てなゝめなり。(岩波書店『芭蕉文集』)

この「柴門景を追てなゝめなり」という表現は、杜甫の「野老」(『詳註』卷九。『杜律集解』卷上)の詩から出ている。

野老籬邊江岸廻 野老の籬辺江岸廻る

柴門不正逐江開 柴門正しからず江を逐うて開く

『詳註』卷九に引く南宋の黄鶴の注に拠れば、「当に是れ上元元年の冬の作なるべし」ということになり、上元元年(七六〇)春末、成都の郊外、浣花溪のほとりに新居を築いて程なくの作であることがわかる。仇兆鰲は「此れ草堂に在りて時に感ずるなり。江岸回曲し、其の柴門正しく設けざる者は、江面を逐うて開かんが為なり。」と言う。即ち、この詩は成都の草堂で時に感じて作られたものであり、江岸が曲がっているために、柴門の形もそれに沿って曲がって開かれていますということ

がわかる。芭蕉はこの柴門の造りを模して、新築された芭蕉庵の柴門も富士をよく見晴らすように曲げて斜めにつけたというのである。いかに芭蕉が成都浣花溪の草堂を意識し、自らの芭蕉庵になぞらえていたか、明白である。

四 『奥の細道』と「同谷紀行」の旅

芭蕉は新築された芭蕉庵に移り住む三年前の元禄二年(一六

八九)三月二十七日、弟子の曾良を伴い、『奥の細道』の旅に出発している。また、杜甫は成都の郊外、浣花溪のほとりに新居を築いた前年の乾元二年(七五九)十月、「発秦州」の詩を作って同谷に至る、いわゆる「同谷紀行」の旅をしている。

二つの旅を比較してみると、芭蕉の『奥の細道』の旅は、「猿雖(推定)宛書簡」(元禄二年二月上・中句筆)に拠れば、

水上の淡きえん日までのいのちも心せはしく、去年たびより魚類肴味口に拂(ひ)捨(て)、一鉢境界乞食の身こそたうとけれとうたひに侘(び)し貴僧の跡もなつかしく、猶ことしのたびはやつし／＼てこもかぶるべき心がけにて御座候。

とあるように、やつれやつれて乞食に身を落す覚悟の旅であることがわかる。それは、芭蕉がいかに「現世の浮華を去った生活への徹到を念じていたか」を示すものと言えよう。いわば「風雅」のために自ら苦を求める旅である。

それに対して、杜甫の「同谷紀行」の旅は「発秦州」(『詳註』卷八。『分類集註』卷一五言古紀行類)に拠れば、

我衰更懶拙	我衰えて更に懶拙なり
生事不自謀	生事自ら謀らず
無食問樂土	食無うして樂土を問
無衣思南州	衣無うして南州を思
漢源十月交	漢源十月の交
天氣如涼秋	天氣涼秋の如し
草木未黃落	草木未だ黃落せず

況聞山水幽 況んや山水の幽なるを聞くをや

栗亭名更嘉 栗亭名更に嘉し

下有良田疇 下に良田疇あり

充腸多薯蕷 腸に充つるに薯蕷多く

崖蜜亦易求 崖蜜亦た求め易し

密竹復冬笋 密竹には復た冬笋あり

清池可方舟 清地舟を方す可し

雖傷旅寓遠 旅寓の遠きを傷むと雖も

庶遂平生遊 庶わくは平生の遊を遂げん

とあり、生事(暮らし向き)のため、楽土を求めて食豊かなる
と聞く漢源(同谷一帯の地方)に赴いた旅であるということが
わかる。しかし、この旅が楽でなかったことは、「同谷紀行」
の各詩篇から窺える。その中でも特に、「発秦州」「赤谷」「寒
峡」「乾元中寓居同谷縣作歌七首」其一の四篇の紀行詩は驚く
べきことに『奥の細道』の文章に大きな影響を与えているので
ある。今、各々を対比させてそのことを考察してみたい。

(1)『奥の細道』桑折の項と「赤谷」の詩

其夜飯塚にとまる。温泉あれば湯に入て宿をかるに……夜
に入て雷鳴、雨しきりに降て、臥る上よりも、蚤蚊にせ
ゝられて眠らず。持病さへおこりて消入計になん。短夜の
空もやう／＼明れば、又旅立ぬ。猶夜の餘波心すゝまず、
馬かりて桑折の驛に出る。遙なる行末をかゝえて、斯る病
覺束なしといへど、羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道
路にしなん、是天の命なりと、氣力聊とり直し、路縦横

芭蕉における杜甫

に踏で伊達の大木戸をこす。(岩波書店『芭蕉文集』)

この文章は、『奥の細道』の旅の覚悟を述べたものである。即
ち、身を捨てる覚悟をしているからには、のたれ死にをするよ
うなことがあつても、それは天命であると悟っている。これに
は、杜甫の「赤谷」(『詳註』卷八。『分類集註』第一五言古紀
類)の詩が対応する。

天寒霜雪繁 天寒くして霜雪繁し

遊子有所之 遊子之く所あり

豈但歲月暮 豈に但歲月の暮るるのみならむや

重來未有期 重ねて來らむこと未だ期あらず

晨發赤谷亭 晨に發す赤谷の亭

險艱方自效 險艱方に效自りす

亂石無改轍 亂石改轍無く

我車已載脂 我が車已に載ち脂さす

山深苦多風 山深くして多風に苦しむ

落日童稚飢 落日童稚飢う

悄然村墟迴 悄然たり村墟の迴なるに

煙火何由追 煙火何に由りて追はむ

貧病轉零落 貧病転た零落す

故郷不可思 故郷思ふ可からず

常恐死道路 常に恐る道路に死して

永為高人嗤 永く高人に嗤はるるを為さむことを

詩中の「病」「迴」「死道路」の語は、『奥の細道』の文中に取
り入れられている。もっとも、「死道路」の語は『論語』子罕

篇の「予死於道路乎(予れ道路に死なん乎)」の句に基づいてい
る。この句は、「私が道はたでのたれ死にをする筈もないでは
ないか」という意味であり、杜甫の句は、道はたでのたれ死に
していつまでも「高人」に笑われることになるのを恐れるとい
う意味である。両者とも、「死道路」ということを極度に忌み
嫌っている。しかし、芭蕉は逆である。この語の影響下にあり
ながら、中身は全く独自の捉え方をしているのである。

また、「病」の語は、実は曾良の『旅日記』五月二日の条に
は一言もないのである。即ち、「晝ヨリ曇、夕方ヨリ雨降、夜
に入強。飯坂に宿。湯ニ入。」と記されている。また、病の苦
痛で馬までやとったという翌五月三日の条にも、芭蕉の病気の
ことは全く記されていない。即ち、「三日雨降ル。已の上冠止。
飯坂を立。桑折ヘニリ。折々雨降ル……」である。芭蕉が当時
胆石症のための発作腹痛の持病を持っていたことはよく知られ
ているが、この時「例の発作なので曾良が特に記さなかったも
のと思われる」(杉浦正一郎・宮本三郎校注『芭蕉文集』一一九
ページ補注)なのか、「事実を離れて多少の誇張があり、旅の
艱難を述べそれに対する紀行の主人公覚悟を披瀝すること文
学作品としてのアクセントをつけたものであろう」(注11に同
じ)なのか、二説あるようだが、私は、この桑折の項は「赤
谷」の詩中の語をかりるならば、旅の「險艱」を強調するフィ
クションであると考える。芭蕉は、杜甫の「貧病」「險艱」の
同谷紀行の旅を念頭に置いて自らの旅の中で演じているのであ
る。

(2) 『奥の細道』出羽越の項と「寒峽」の詩

あるじの云、是より出羽の國に大山を隔て、道さだかなら
ざれば、道しるべの人を頼て越ゆべきよしを申。……ある
じの云にたがはず、高山森々として一鳥聲聞かず、木の下
闇茂りあひて夜る行がごとし、雲端につちふる心地して、
篠の中踏分／＼、水をわたり岩に蹶て、肌につめたき汗を
流して、最上の庄に出づ。(岩波書店『芭蕉文集』)

右の文章には、杜甫の「寒峽」(『詳註』巻八。『分類集註』巻
一五言古紀行類)の詩が対応する。

行邁日悄悄 行邁日に悄悄たり

山谷勢多端 山谷勢い多端なり

雲門轉絶岸 雲門絶岸転ず

積阻天寒 積阻天寒に羶る

寒硜不可度 寒硜度る可からず

我實衣裳單 我実に衣裳単なり

况當仲冬交 況んや仲冬の交に当り

泝汾増波瀾 泝汾波瀾を増すをや

野人尋煙語 野人煙を尋ねて語り

行子傍水餐 行子水に傍うて餐す

此生免荷爰 此の生爰を荷のうことを免る

未敢辭路難 未だ敢て路の難きを辭せず

詩中の「山」「雲」「羶」(『爾雅』に「風而雨土爲羶」とある)、
「度」「水」の語は、『奥の細道』の文中に取り入れられてい
る。『詳註』には「首め峽中の勢險にして気寒きを記す。雲門

乍ち転じ、却って絶岸に逢ふ、積阻の処、又天寒に霾る、此れ所謂勢多端なり。単衣仲冬、寒きを衝いて峽を渡る、旅人の困しみ此の如し。」と注されているが、芭蕉も同様の苦しみを以て出羽越をしたと言おうとしていることがわかる。なお、「雲端につちふる」を、杜甫の「鄭駙馬潛曜宅宴洞中」(『詳註』卷一。「杜律集解」卷上)の詩にある「已入風證霾雲端(已に風證に入れば雲端に霾る)」の句に求める考えもあるが、土の雨に降られて山を越え、川の流れに沿って村落にたどり着くまでの紀行の内容が類似している点や語の共通性などを考えると、やはり、「寒峽」の詩が芭蕉の脳裏に深く刻み込まれていたものと思う。

(3) 『奥の細道』須賀川の項と「乾元中寓居同谷県作歌七首」其一及び「発秦州」の詩

此宿の傍に、大きな栗の木陰をたのみて、世をいとふ僧有。椽ひろふ太山もかくやと間に覺られて、ものに書付侍る。(岩波書店『芭蕉文集』)

この文章に影響を与えているのは、まず、杜甫の「乾元中寓居同谷県作歌七首」其一(『詳註』卷八。「分類集註」卷十四歌行雜賦類)の詩である。

有客有客字子美	客有り客有り字は子美
白頭亂髮垂過耳	白頭亂髮垂れて耳を過ぐ
歲拾橡栗隨狙公	歳々橡栗を拾うて狙公に隨う
天寒日暮山谷裏	天寒く日暮る山谷裏
中原無書歸不得	中原書無うして歸り得ず

芭蕉における杜甫

手脚凍皴皮肉死 手脚凍皴皮肉は死す
嗚呼一歌兮歌已哀 嗚呼一歌す歌已に哀し
悲風爲我從天來 悲風我が爲めに天従り來たる

詩中の「拾橡栗」の語は、『奥の細道』では「椽ひろふ」と表現されている。『詳註』では『唐書』の「甫秦州に客し、薪を負ひ橡栗を採りて自給す」を引用し、「今同谷に在りても亦然り」と注している。また、詩中の「山谷」と文中の「太山」の語は類似している。前に引用した「発秦州」の詩で同谷に赴く希望を述べていたにもかかわらず、現実には、『詳註』に注するように、「垂老の年、寒山迹を寄せ、食無く衣無く、幾ど身を自ら保てず、感じて嘆を發する所以なり。悲風天より來たる、旅人の愁を助くるが若し。」であった。いわば「風騒の極地」と言えよう。

また、先に引用した「発秦州」の詩に、「栗亭名更嘉(栗亭名更に嘉し)」という句があるが、その「栗」の語が『奥の細道』須賀川の文に取り入れられている。同谷地方にある「栗亭」というといかにも栗の産地らしくいい名であり¹⁵という意味であり、『註註』に「同谷に赴く時、蓋し栗亭に寓さんとするを知るなり」と注されている。芭蕉の文で言えば「栗の木陰をたのみて」となる。その「栗の木陰をたのみて椽ひろふ」僧は、曾良の『旅日記』に拠れば實在の人物らしいが、同時に杜甫のイメージをも重ねていると考えられる。ただ、一方は隠者、他方は「風騒」の人という違いはある。なお、「椽ひろふ」の語は、西行の「山深み岩にしたどる水とめんかつが落つる

椽拾ふほど」(山家集)に拠ると言われているが、栗と椽とが同谷の産物であり、それらを杜甫があてにして生活していた点などを考え合わせると、やはり、杜甫の「乾元中寓居同谷県作歌七首」其一及び「発秦州」の詩が下地にあったと言えよう。

五 芭蕉の発句と「白小」「徐歩」の詩

芭蕉の発句に影響を及ぼした杜甫の律詩の中で、特に「白小」(『詳註』卷十七。『分類集註』卷二十五言律鳥獸類)の詩と、「徐歩」(『詳註』卷十。『杜律集解』卷二)の詩を取り上げ、発句との関係を論じてみたい。前者は、律詩でありながら芭蕉引用の律詩の殆どすべてを収める『杜律集解』に載せない。後者は、従来典拠として取り上げられなかった詩であるが、充分典拠になり得る内容を含んでいる。

(1) 芭蕉の発句と「白小」の詩

明ほのやしら魚しろきこと一寸 甲子吟行(貞享元年冬、桑名での作)

雪薄し白魚しろき事一寸 笈日記(櫻下文集・熱田三詔)

僂レ (岩波書店『芭蕉句集』)

この発句に影響を与えた「白小」の詩は次の通りである。

白小羣分命 白小も群命を分かつ

天然二寸魚 天然二寸の魚

細微霑水族 細微にして水族を霑す

風俗當園蔬 風俗園蔬に當つ

入肆銀花亂 肆に入れば銀花乱る

傾筐雪片虛 筐を傾くれば雪片虚し
生成猶捨(捨)卵 生成猶お卵を捨くという
盡取義何如 尽く取るは義何如

『詳註』に引く旧注では、白小のことを「即ち今の麵条魚なり」と注する。しら魚のことである。「白小も群命を分かつ天然二寸の魚」が芭蕉の「しら魚しろきこと一寸」に影響を与えていることは、弟子の素堂の『甲子吟行』の序文に「桑名の海邊にて白魚自きの吟は、水を切て梨花となすいさぎよきに似たり。天然二寸の魚といひけむも此魚にやあらむ」とあるところから明らかである。ただ、この句は『甲子吟行』に拠れば、桑名の海岸での吟であること、また、桑名地方では白魚の成熟をいう諺に「冬一寸春二寸」という由(以上、岩波書店『芭蕉句集』二四六ページ補注参照)、芭蕉がこの諺を聞いていたとすれば、あながち杜甫の詩句から影響を受けたと論断するのは早計に失しよう。しかし、私はやはり杜甫の詩にこだわりたい。それは、芭蕉の弟子の支考の『笈日記』に、「おなじ比にや、浜の地蔵に詣して(支考の前書)雪薄し白魚しろき事一寸此五文字口おしとて後には明ほのともきこえ侍し」とあるように、初案「雪薄し」が杜甫の「雪片」という語の影響を受けていると思うからである。どちらも白魚の白い様を形容している。ただ、杜甫の詩は『詳註』に引用する清の盧生淮の注に「白小細微なるを以て尽く取る……以て民俗の不仁を歎くなり」と注されているように、白小を取り尽くす人々への憤りと共に白小への憐憫の情を表すのに対し、芭蕉の句は、あけぼの

の中に浮かぶしら魚の神秘的な美をとらえている。

(2) 芭蕉の発句と「徐歩」の詩

二たび桐葉子がもとに有て今や東に下らんとするに

牡丹蕊ふかく分出る蜂の名残哉 甲子吟行(貞享二年)

牡丹蕊分け這出る蜂の名残かな 皴笥物語(真蹟)

(岩波書店『芭蕉句集』)

この発句の意味は、「蜂が牡丹の蕊深く蜜を十分に吸って深い奥から這い出して飛び立って別れて行くことだ。牡丹を桐葉、蜂を自分に擬して、自分もその蜂の如く、主人の厚遇をうけて今旅立つことだの意をこめた挨拶。」ということである。特に、「蕊」と「蜂」の語は次の「徐歩」の詩に拠ると考えられる。

整履歩青蕪 履を整へて青蕪に歩す

荒庭日欲晡 荒庭日晡ならむと欲す

芹泥隨燕齧 芹泥燕齧に随ひ

蕊粉上蜂鬚 蕊粉蜂鬚に上る

把酒從衣濕 酒を把って衣の湿ふに従せ

吟詩信仗扶 詩を吟じて杖の扶くるに信す

敢論才見忌 敢て才の忌まるるを論ぜんや

實有醉如愚 實に酔うて愚の如くなる有り

この「徐歩」の詩は、杜甫が自宅の園をそぞろ歩きして見た景物や情感を述べている。四句目の「蕊粉」とは花粉のことで、『詳註』巻十に「一に花蕊に作る」と注されている。また『詳註』ではこの句を「蜂蕊を採りて回る」(蜂採蕊而回)と注している。即ち、蜜を吸う蜂が、その鬚に花粉を採って飛び回る

芭蕉における杜甫

という意味であり、発句と詩はよく似た内容を表していると言える。

ちなみに、黒川氏はこの発句の出典を『曲江二首』其二(『詳註』巻六、『杜律集解』巻上)とし、「花を穿つ蛺蝶は深々と見え、水に点する蜻蛉は款款として飛ぶ」(穿花蛺蝶深深見、點水蜻蛉款款飛)の句をあげておられる(前掲書 三七一ページ)が、「深」という語に共通点は見られるものの、『皴笥物語』(真蹟)の先案の句では「分て」とあり、『詳註』に引く明の邵宝の注では、この語を「深々は其の翩翩と隠れ見ゆるを摹す(深々摹其翩翩隱見)」と注しており、芭蕉の発句とは意味が異なっている。また、「蛺蝶」と「蜂」とでは大いに異なるし、「蕊」という句のポイントになる語が見えないのが気になる。「蜂」と「蕊」の語が共通していることや、蕊粉をつけた蜂が厚遇を受けた芭蕉をたとえていることなどから、「徐歩」の詩がこの発句の背景にあると言えよう。

六 芭蕉における杜甫

芭蕉にとって杜甫は、風雅(芸術)の師であった。特に芭蕉の芸術における二度の大きな転回期(延宝末年〜天和初年の芭蕉三十代後半と元禄二年『奥の細道』の旅を契機とする芭蕉四十代後半)に、杜甫の詩が強い影響力をもたらしたことは、既に、第三章——芭蕉庵と成都浣花溪の草堂——や、第四章——『奥の細道』と『同谷紀行』の旅——の所で述べた。即ち、ある時は自分の現実を杜甫の詩にあてはめて描き、ある時は杜甫

の詩にあてはめるために自分の現実を変えて描くことまでしたのである。⁽²¹⁾その他、芭蕉が談林俳諧からの脱皮を志し、蕉風俳諧を確立していった天和、貞享、元禄年間に杜甫の影響を受けた多くの作品が作られているということも事実である。芭蕉が自らの生活や芸術を透徹した眼で見つめ直す時、そこには厳しく生きた杜甫の姿があり詩があった。

注

- (1) 『聯珠詩格』所収の杜甫の詩はすべて七絶で次の通りである。
「春水生」「漫興」「集靈台」「吳越」「江南逢李龜年」「絶句」
- (2) 大谷篤藏校注『芭蕉句集』(岩波書店 日本古典文学大系 一九六二初版 一九八四再版) 一九〇ページ頭注参照。ちなみに、杉浦正一郎・宮本三郎校注『芭蕉文集』(岩波書店 日本古典文学大系 一九五九初版 一九八五再版) 三六ページ頭注には、『唐詩選』による、とある。
- (3) 仁枝忠『芭蕉に影響した漢詩文』(教育文化センター 刊 一九七二)に拠る。
- (4) 「連雨漲江二首」其一の詩は、紹聖二年(一〇九五)東坡六十歳、惠州での作。その詩の中で、東坡は東江の出水の事実に基づき、「幽人」としての立場で侘しい感慨を歌っている。
- (5) 黒川洋一『杜甫』(筑摩書房 中国詩文選 一九七三)
- (6) 荻野清校注『芭蕉文集』(岩波書店 日本古典文学大系) 三七二〜三七四ページ参照。(推定)とは、荻野氏の校注に拠る。
- (7) 注(6)に同じ。三七四ページ頭注参照。
- (8) 芭蕉『菝の小文』(貞享四年 一六八七)に「風雅におけるもの、造化に従ひて四時を友とす。」とある。
- (9) 吉川幸次郎『論語』上(朝日新聞社 新訂中国古典選 一九六五初版 一九七七再版) 二八二ページ参照。
- (10) 『詳註』に引用する『杜臆』には、「高人、指龐公輩(高人とは龐公の輩を指す)」と注している。
- (11) 井本農一『芭蕉集』(尚学図書 鑑賞日本の古典 一九八二) 三二七ページ参照。
- (12) 杉浦正一郎・宮本三郎校注『芭蕉文集』 八六ページ参照。
- (13) 荻原井泉水『奥の細道ノート』(新潮文庫 一九五六初版 一九六九再版) 九一ページに、『曾良日記』には途中の地名は書いてないが、地図にあてて見ると、明神から南に切れて赤倉に出て、小国川の支流を渡って^{はな}別(『曾良日記』の一ハネ)、それから山刀伐峠(標高四七〇米)を越えて市野野に出た。ここまでは難路だったので、それからは赤井川(最上川の支流)に添うて下るので、峡谷であるから、道も好く、次から次と部落もある。」とある。
- (14) 華文軒編『杜甫卷』上編唐宋之部第三冊(中華書局

古典文学研究資料彙編 一九六四初版 一九八二再版) 九

九五ページ〔宋〕無名氏の項に、「杜子美《寓居同谷七歌》
之類、風騷之極地、不在屈原之下」とある。

(15) 鈴木虎雄・黒川洋一訳注『杜詩』第三冊(岩波文庫
一九六五) 一七一ページ訳参照。

(16) 井本農一『芭蕉集』三三二ページに、「四月廿三日同
所滞留。晩方へ可伸(栗の木蔭に庵住みの僧、築井弥三
郎、俳号栗斎。庵を可伸庵と呼ぶ)二遊。帰に寺々八幡を
拝。」とある。

(17) 杉浦正一郎・宮本三郎校注『芭蕉文集』七七ページ頭
注参照。

(18) 井本農一編『芭蕉』(角川書店 鑑賞日本古典文学 第
28巻 一九七五) 九八ページ参照。

(19) 大谷篤蔵校注『芭蕉句集』一一〇ページ頭注参照。

(20) 井本農一『芭蕉Ⅱその人生と芸術』(講談社現代新書
一九六八初版 一九八一再版) 三ページ参照。

(21) このことは、芭蕉が東坡の「飲湖上初晴後雨二首」な
どの詩に基づき、『奥の細道』象瀉の項を曾良の『旅日記』
の天候の事実を曲げて虚構化した点にも窺える。なお、芭
蕉は東坡詩を『古文真宝』や『聯珠詩格』などの総集によ
って読んだのではなく、二十五巻本あるいは三十二巻本の
別集によって読んだという。以上、合田方子「水光激瀼晴
方好 山色空濛雨亦奇——細道の旅(象瀉)の虚構を生ん
だ東坡詩集」(近藤光男編『中国古典詩叢考 漢詩の意境』

勁草書房 一九六九) に詳しい。

卒業論文・修士論文題目

昭和六十二年三月卒業(十一名)

天田 明美 李賀の詩—その象徴的手法による独自の意境
大谷 美穂 王昌齡の辺塞詩

加藤 直子 曹操の樂府詩とその生き方に関する研究
久保田 薫 成仿吾研究 初期の活動とその評価

鈴木世津子 中国神話研究—女媧神話を中心として—
原田 直枝 賦史に於ける『文選』紀行三賦の意義

福本 薫 戴望舒研究—詩論と詩風の変遷について—
星野 奈美 『莊子』研究—『莊子』内篇の寓言に関する一考
察

溝部 慶子 魯迅文学の出發について

三谷 倫子 江戸後期の日本漢学 柴野栗山研究
坂野 純子 張抗抗試論—『夏』と『北極光』を中心として

昭和六十二年三月修了(三名)

直井 文子 斎藤拙堂研究—『拙堂文話』刊行時まで—
橋本未希子 中国児童文学研究—台湾における現状

村越貴代美 朱淑真論